

移動からとらえる地域と教育

—「地域教育計画論」の視点—

Motion in Place and Education / Place and Education in Motion: Basic Viewpoints on “Educational Community Designing”

児島 明 KOJIMA Akira

(准教授・発達科学講座 akirak@rstu.jp)

キーワード：移動 motion, 位置取り positioning, ストーリー story、「地識」 street wise、生活史 life history

はじめに

研究者としての私の生活史には、問題関心のありようをめぐって、ひとつの大きな転換点が存在する。それは1997年から98年にかけてのトロント大学オンタリオ教育研究所(OISE/UT)への留学経験である。カナダを専門とするわけでもなければ英語力もおぼつかない私がトロントへ向かったのは、偶然のめぐりあわせというほかない。当時私は、どちらかと言えば理論志向の強い修士論文を書き終えたばかりであった。「リテラシー研究の視座—単一的識字観から多元的識字観へ—」(名古屋大学大学院教育学研究科1996年)と題したその論文で、私は、一見中立的な技術と考えられがちな文字使用の背後に潜む権力構造について原理的な考察を試みた。多くの文献を読み込みながら自分なりの見解をまとめていく作業はスリリングであり、書き終えたあとにはそれなりの達成感を味わうことができた。だが、達成感はほどなく焦燥感に取って代わられた。多様で複雑な現実と切り結ぶことのできる研究をどのように進めていくべきか、いまだ確かな見通しを持っていないからである。私は行き詰まってしまった。

ちょうどそんなとき、当時私が所属していた名古屋大学大学院教育学研究科とOISE/UTとの間で交換留学の提携がなされ、名古屋大学からの最初の交換留学生を募集するチラシが張り出されていた。何となく気になった私は、自分には当面関係ないがと思いながらも、話だけでも聞いてみようと思っただけでなく、担当教員の研究室を訪れた。振り返れば、「うっかり」訪れてしまったのである。先方へ留学生第一号を送りたいという大学側の思惑と、研究の方向性に行き詰まりを感じる現状を打開したいという私自身の衝動が噛み合わさるのにさして時間はかからず、翌週にはもう書類の準備に取りかかっていた。

トロントに到着したその日から、街を歩けば民族的背景を異にする実にさまざまな人びととすれ違った。英語を学ぼうと顔を出さなくなった自治体主催のESL(第二言語としての英語)教室では、移民や難民としてカナダに来たばかりの人びとが、それぞれに味わいのある英語で話しかけてきた。国籍もアフガニスタン、ユーゴスラヴィア、メキシコ、イタリア、中国、韓国とさまざまであった。日本からの移住者との出会いもあった。かれらとの交流を通じて、私は、文化や歴史や場所に刻み込まれてきた、また、日々刻み込まれてゆく移動の痕跡に思いを馳せるようになっていったのである。

そのような視点から世界をとらえ返してみると、見知ったはずの風景(たとえば「日本」)が途端によそよそしい相貌を見せ始めた。地域や教育を移動の視点から考えてみたいという私の関心は、このあたりから少しずつ芽生えていったといえるだろう。本稿は、そのような関心を徐々に深めていく過程で、私が他者と出会い、考え続けてきたことの素描を試みたものである。

1. 「移動の時代」

1980年代後半から、人・モノ・カネの国境を越えた移動が多様化、加速化している。国連の推計によれば、2005年には1億9100万人の移民がおり、非正規の移民もこの半数はいると推測されており、過去15年間で3600万人の増加となる。また、2008年の経済開発協力機構(OECD)の『21世紀の移民人口のプロフィール』によれば、現在、OECD諸国全体において、15歳以上で外国生まれの人口は7500万人以上であり、全人口の9%を占めている(定松2008)。『移動の時代』という邦題をもつ書物の著者カレン・カプランは20世紀を、「だんだん多くの人々が国民や地域や民族の定位置やアイデンティティから引き剥がされ、はずされてしまったことを特徴とする時代」(カプラン2003, p. 186)と表現しているが、21世紀は人びとの移動とその背景、あるいは移動による効果の多様性・重層性をいっそう押し進める時代となるものと思われる。

こうした世界的潮流は、当然日本をも巻き込みながら展開しているものであり、とりわけ近年の外国人住民の急増は、地域社会においてかれらを可視化させることでさまざまな取り組みへと結びつき、国家レベルでも「多文化共生」をキーワードとした施策の重要性が認識されつつある。こうした近年の動きのみに目を向けると、あたかも人びとの移動は最近になって急に始まったものであり、しかも、「外国人」の問題に限定して考えてしまいがちになるが、先の引用文中でカプランが述べているとおり、越境移動は何も国家間の移動に限定されるわけではない。また、「国外から」人が入ってくることをのみを指すのでもない。「国際化」や「グローバル化」といった言葉を人びとが耳にするようになるずっと以前から、日本国内において多くの人びとが地域間移動を繰り返してきたし、過去においても現在においても、日本から「国外へ」人びとの移動はつねに存在する。

移動の観点からとらえた場合、日本社会はどのような姿を

見せるのか。移動する個人に焦点を合わせた場合、社会や地域はどのようなものとして立ち現れてくるのか。以下、順に見ていくことにする。

2. 人の移動からみる日本社会

(1) 日本へと移動する人びと：受け入れの現状

近代以降の日本への移動でまずふまえなければならないのは、1895年の台湾併合、1910年の韓国併合を経て植民地と日本列島との間に生じた人の移動の流れである。第二次大戦末期の日本列島には、いわゆる「強制連行」による移動者も含めて、230万人に達する朝鮮人が暮らしていた（逆に、朝鮮半島には約70万人、台湾には約39万人、「満州国」を含むその他海外に142万人を超える日本人が暮らしていた）。そして1945年、日本の植民地支配に終止符が打たれると同時に多くの朝鮮人が本国へと帰還していったが、帰還後の生活基盤を欠いていたり、すでに日本に生活の根を下ろしていた人の一部、64万人は、45年以降も日本にとどまり続けることになった（田中 1995, 町村 2007）。

1990年6月に「出入国管理及び難民認定法」（以下、「入管法」）が改定施行されてから、すでに20年が経過した現在、外国人登録者数は200万人を突破している。法務省入国管理局の公式発表によれば、2009年末現在の外国人登録者数は218万6,121人、総人口の1.71%である。外国人登録者の国籍（出身地）数は189であり、そのうち中国が680,518人で全体の31.1%を占め最多であり、以下、韓国・朝鮮578,495人（26.5%）、ブラジル267,456人（12.2%）、フィリピン211,716人（9.7%）、ペルー57,464人（2.6%）と続く。

旧植民地出身者である在日韓国・朝鮮人や在日中国人と区別して「ニューカマー」（新来外国人）と称される人びとの来日の経緯を概観すれば、まず1970～80年代に、フィリピンやタイからの、主としてサービス産業で働く女性労働者、「中国帰国者」、ベトナム・ラオス・カンボジアからの「インドシナ難民」、さらには欧米諸国からのビジネスマンの来日があいついだ。そして1980年代後半以降には、南アジアやアラブ諸国からの非正規労働者や南米諸国からの出稼ぎ労働者、さらには日本人とのあいだで国際結婚した人びとの来日により、日本に居住する外国人が急増する。とりわけ、1990年6月に改定施行された「入管法」が、「不法就労者」を雇用した日本人雇用主に対する罰則規定も盛り込むかたちで「不法就労者」の排除を強化する一方、日系人とその家族の滞在と就労を合法化したことは、その後、南米諸国から来日する日系人の急増をもたらした点で大きな転換点であったと言える。さらに最近の動きとしては、経済連携協定（EPA: Economic Partnership Agreement）に基づき、2008年よりインドネシア、2009年よりフィリピンから看護師・介護福祉士候補者の受け入れを開始したことが挙げられるだろう。

それともなっていて、公立学校に通う外国人児童生徒も増加する一方であり、文部科学省の公式発表によれば、2008年9月現在、公立小・中・高等学校、中等教育学校および特別支

援学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒数は28,575人である。

日本へと移動するのは外国人ばかりではない。企業等の国際的諸活動の進展にともなって海外に長期間在留した後に帰国する日本人も少なくない。文部科学省の「学校基本調査」によれば、海外に長期間（1年以上）在留した後、日本へ帰国した児童生徒数は、2008年度間で小学校、中学校及び高等学校等合わせて11,749人となっている。

このように、日本社会はすでに、国外からの多くの移動者を内に含んでいることをまずは確認することができる。

(2) 日本から移動した人びと：送り出しの歴史

海外からの外国人の受け入れという論点に関心が集中するばかりに忘れられがちなのが、日本もかつては移民送出国であったという歴史的事実である。明治に入った日本は近代化を急いで推し進めていたが、その過程で農村が崩壊していった。農民の地租をあてにした国家財政が組まれ、農民にはそれが大きな負担となっていった。こうした苦境を背景に、農村から都会へと人口が流出した。しかし、都会に出ていまだ工業化の進展していない段階では就職の機会は乏しく、仕事があれば条件のいかに問わず海外でもどこへでも行かざるを得ない状況に置かれていた。

当初はハワイそしてアメリカ本土へと移民が渡っていった。目的はあくまでも出稼ぎであり、移民たちは故郷に錦を飾ることだけを夢見て、過酷な農園労働に耐えた。しかし日本人移民は、白人より低賃金で働くことによってかれらの職場を奪うことになり、さらに経営者からはスト破りに利用された。そのため排日気運が高まり、カナダでもアメリカでも移民が制限されることになった。こうしてアメリカ、カナダへの道を閉ざされて移民が次に目指したのが、ペルーでありブラジルであった。ペルーへは1899年（明治32年）、ブラジルへは1908年（明治41年）に最初の移民が渡っている。

こうして、明治から敗戦にかけて、北米、中南米、東南アジア（最多はフィリピン）の各地へ100万人の人びとが送り出されたと言われる。その結果、現在、南北アメリカ大陸に百数十万人の日系人が生活しているのである。また戦後も、高度成長時代を迎える1960年代前半までは、アメリカ（短期派遣労働者、1956～63年で4,331人）や旧西ドイツ（炭坑労働者、1957～65年で436人）に出稼ぎ労働者を送り出していた（鈴木 1992, 高橋 1997）。

(3) 日本国内を移動した／する人びと

国境を越える移動だけが人びとの移動経験なのではない。日本の歴史を少し遡れば、さまざまな背景や理由のもとでの越境移動が存在する。「19世紀後半、文明化の開始と産業化の本格化とともに、人びとは移動を一挙に本格化させる。人びとは生地を離れ、村から町、町から都市へと出かけ、あらたな生活を開始し、かつてない体験を重ねるようになる」（成田 1998, p. 2）。その意味では、日本の近代史は移動の歴史であるといっても、あながち間違いではないだろう。

ただし、「村の外へ出る」ことの意味合いは、「離郷」が自らの意志によるものか、不本意ながら行なわれるものかで大きく異なっていた。いわゆる「離郷の階層性」（岩本 1994）の問題である。日清・日露戦争期から第一次大戦期にかけて、貧しい小作農家の二、三男や娘は一定期間、出稼ぎとして働きに出されることが多かった。主な出稼ぎ先は、女子であれば製糸紡績の女工、男子であれば農・漁業の年雇いから第一次大戦後には都市の商工業・雑業であった。出稼ぎの目的は農家の家計補充にあり、とくに女子の場合にはそうであった（大友 1992, p. 38）。他方、経済的にある程度恵まれた中農以上の青年には、「青雲の志を抱いて都会に出」たり、「笈を負うて遊学の途に就く」可能性が開かれていた（岩本 1994, p. 108）。かれらは都会への関心（＝「都会熱」と修学欲求（＝「教育熱」）を強烈にもちながら、社会的上昇への欲求を形成していったのである（大友 1992, pp. 41-44）。

第二次大戦後になると、「都市化」が進行し、地方から都市へと多くの人が地域を移動した。粒来・林（2000）は、地域移動と就学・就職行動のかかわりについて、戦後を3期に区分した上で検討している。

〔第1期〕高度成長期以前（1946-60年）：この時期は、戦前にもみられた就職時の向都離村型移動が主流であった。中学あるいは高校卒業後に出身地を離れ、雇用機会を求めて都市へ移動したのである。その移動は、自営・農業という家業継承型階層からの離脱（階層移動）をとまなうものであった。

〔第2期〕高度成長期（1961-75年）：大都市における労働需要の増加によって地方出身の就職者が引き続き大都市へ流入すると同時に、高学歴化の進行にともない就学のための移動も増加した。

〔第3期〕低成長期（1976-90年）：成長期後半以降は地方においても雇用機会が拡大する一方で、低成長期をむかえた大都市では就業機会が縮小に転じたこともあって、就職のために移動する相対的メリットは次第に低下した。他方では、銘柄大学への進学にともなう地域移動という形態も目立つようになっており、高学歴社会における移動の新たな局面が、階層差をとまなないながら顕在化してきた（粒来・林 2000, pp. 74-5）。

時代ごとの社会構造の影響を受け、そのかかわり方は変化しながらも、人生の移行（トランジション）過程において地域移動がもつ意義は現在も変わらず大きいと言えるだろう。

3. 移動のなかを生きるということ：あるカナダ日系人女性の事例から

移動により新たな社会的状況に直面した個人は、持ち合わせの各種の社会的アイデンティティを取捨選択したり、それぞれの配置を組み替えたりしながら、社会的世界との新たなバランスを獲得しようと試みる。つまり、新たな状況に意味を与える際の基本的な枠組みとなるストーリーを紡ぎだす努力を始めるのである。ここでは一例として、戦後、日本からカナダへと移住したひとりの女性に注目し、自らの位置取り

をめぐる彼女の奮闘を追いながら、移動経験と自己形成との関連について考えてみたい（以下の内容は、1997年10月から98年2月にかけてトロント市に在住する日系人女性に対して筆者が実施したインタビュー調査の一部である）。

(1) Aさん（44歳・女性・福島県出身）の生活史概略

Aさんは、1977年にカナダに渡った戦後移住者である。はじめカナダにやってきたのは1977年、24歳のときであった。日本では、短大を卒業後、東京の某私立大学で事務職員として働いていた。その職場でふと目にとまった移民募集の公告が渡加のきっかけとなった。最初は2年で帰るつもりだった。渡加後、ウェイトレスとして働いていた日本食レストランで夫（戦後移住者）と知り合い、トロントで結婚。そして妊娠したのを機に、東京にある夫の実家に戻った。ところが、「舅」や「小姑」に囲まれた生活のなかで、「ここでは子育てはできない。絶対、私の思うようにはいかない」と思い、夫と相談した結果、妊娠8ヶ月になる頃に再度のカナダ行きを決めた。

しかし、当初からカナダへの永住を固く決意していたわけでもない。自分に十分な英語能力がないゆえに、将来の子どもとのコミュニケーションに不安を感じるAさんは、子どもがまだ低学年の頃には、日本の学校が始まる4月の数ヶ月前になると、毎年帰国を考えたという。今では「もうあきらめ」て、カナダに永住するつもりであり、現在は、夫、息子（13歳と15歳）、娘（12歳）とともに、トロント市郊外の閑静な住宅地にある簡素な一軒家に暮らしている。そして、トロント市内の日本料理店でパートタイムで働く傍ら、週末は、日系の子どもたちを対象とした日本語教室（自分たちの子どもへの日本語・日本文化の継承を目的とし、土曜日に開講）で日本語を教えている。

(2) 位置取りをめぐる葛藤

では、カナダ社会におけるAさんの社会的経験はいかなるものなのだろうか。Aさんはインタビューのなかで、他者（白人）によってエスニック・ステレオタイプを一方向的に押し付けられることが日常茶飯事であることへの不満を語った。例えば通りを歩いていると、白人の子どもが両手で目をつり上げながらアジア系住民をからかう歌を歌ったり、わざと中国語でしゃべりかけてきたりして「すごく馬鹿にしているというのがわかる」という。エスニック・ステレオタイプの生産においてマスメディアが果たす役割も大きい。マスメディアによって歪曲あるいは過度に誇張されたイメージが、日常生活における他者との会話においても話題にのぼること、自身が「日系人」ないし「日本人」として好奇なまざしを向けられる客体であることを、Aさんは痛感することになる。

さらに、「日系人」ないし「日本人」に対する否定的な意味づけは、他でもない息子や娘からもなされる。Aさんの家庭では子どもの誕生以来、日本語を使用してきたが、かれらが学校に通い始め、交友関係も広がるにつれて、言語的には次第に英語が優勢になってきた。最近では、現地の学校の同級生を家に連れてくるとき、Aさんに向かって「お母さん、日本

語絶対しゃべらないで。恥ずかしいから」という。そこで A さんはけっして流暢ではない英語で話すのだが、やはりよい気持ちはしない。また、A さんの子どもたちは英語名の他に日本語名ももっており、家庭ではたいてい日本語名を使っている。しかし、友達が来るとなると、かれらは自分のことを日本語名ではなく英語名で呼んでくれと A さんに言う。全体社会のなかでの日系人の周近的な位置づけを、子どもなりに敏感に感じ取っているのである。

(3) ストーリーの生成と生き直される地域

しかしながら A さんは、外部からの一方的な位置づけに甘んじる受動的な存在ではない。彼女は、他者によって「移民」や「日系人」という社会的カテゴリーのもとに周辺化された自らの存在を、自身の経験にとってより重要性をもつ社会的アイデンティティを用いて枠組そのものを再構成することによって位置づけ直す。いかなる社会的アイデンティティが採用されるかは状況によるが、A さんの場合、それは異文化・異言語という困難な環境のなかで苦労して子育てしてきた「母親」としての社会的アイデンティティであった。以下の引用は、週末に日本語教室で教鞭をとる A さんが、教師の適性について語ったものであるが、この語りを支えているのは、異文化環境における「子育て経験者」としての自負である。

「先生やるにはやっぱりね、ああいう（日系二世、三世、四世などの一引用者注）子どもたちをみるにはやっぱり、いくら日本で高学歴であっても、独身で来たばかりの人がやるよりも、子どもを苦労して育てて、環境がわかって、そうやってはじめて教えられると思う。」

ここにおいては、「母親」としての社会的アイデンティティが中心にもってこられることにより、「移民」ないし「日本人」として味わってきたあらゆることが「価値ある経験」としてとらえ直されている。A さんはもはや、「環境」（すなわち地域）から一方的にまなざしを向けられる客体ではない。「環境」が自己に強いる制約や苦勞を身をもって体験しくぐり抜けることで、その「環境」をひとたび自らの身体のうち刻み込んだ A さんは、この身体感覚に深く根ざした「地識（street wise）」（新原 2006, p. 243）によって「環境」を読み直し、そして、生き直すのである。

ここで忘れてはならないのが、このようなストーリーの生成及び地域の再構成において日本語教室という自助組織の存在がもつ意味である。A さんに「子育て経験者」としてのストーリーの生成を可能にしたのは、自らの長期にわたる子育て経験もさることながら、日本語教室における教師としての経験の蓄積および他者との経験の共有により、自らの子育て経験を相対化する視点をもち得たことが大きい。自己形成における自助組織ないしコミュニティ形成の重要性を示す一例とも言えるだろう。

おわりに

人生には、誕生から往生にいたるまでさまざまな節目が存在する。進学、転校、就職、転勤、結婚など、それらの節目にはしばしば移動がともなう。その点からすれば、誰しものが、程度の差はあれ移動のなかで人生を過ごしていくのだと言える。逆に言えば、特定の土地にとどまり「定住している」という現象のほうこそ、出たり、入ったり、あるいは多方向へ展開していく旅の一場面なのかもしれない（メルレル 2006, p. 63-4）。

移動の視点は、「定住」を前提に人びとの営み、地域の歴史や文化を枠付け、その枠に収まらないものをノイズとみなすようなまなざしに挑戦する。そこから展望される地域そして教育とはいかなるものか。まずは、移動する存在としての他者、そして自らと出会い直すことから始めてみることにしよう。

【参考文献】

- 岩本由輝 1994 「故郷・離郷・異郷」 朝尾直弘ほか編『岩波講座 日本通史 第18巻 近代3』岩波書店, pp. 97-132.
- Kaplan, C 1996, "Questions of Travel: Postmodern Discourses of Displacement", Durham: Duke University Press (村山淳彦訳, 2003, 『移動の時代—旅からディアスポラへ—』未来社).
- 児島明 2000, 「カナダ日系人の社会的アイデンティティと教育戦略—複合的マイノリティの観点から—」『名古屋大学教育学部紀要 (教育学)』第46巻, 第2号, pp. 93-102.
- 町村敬志 2007, 「エスニシティと境界」長谷川公一ほか『社会学』有斐閣, 413-444.
- メルレル, A. 2006, 「世界の移動と定住の諸過程—移動の複合性・重層性からみたヨーロッパの社会的空間の再構成—」(新原道信訳) 古城利明監修・新原道信ほか編『地域社会学講座 第2巻 グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会』東信堂, pp. 63-80.
- 成田龍一 1998, 『「故郷」という物語—都市空間の歴史学—』吉川弘文館.
- 新原道信 2006, 「いくつものもうひとつの地域社会へ」古城利明監修・新原道信ほか編『地域社会学講座 第2巻 グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会』東信堂, pp. 227-246.
- 大友正克 1992, 『明治・大正の農村』岩波書店.
- 定松文 2008, 「移民と言語—人は移動するという前提から言語と社会をとらえる—」『ことばと社会』11号, pp. 6-25.
- 鈴木讓二 1992, 『日本人出稼ぎ移民』平凡社選書.
- 高橋幸春 1997, 『日系人 その移民の歴史』三一新書.
- 田中宏 1995, 『在日外国人 新版—法の壁、心の溝』岩波新書.
- 粒来香・林拓也 2000, 「地域移動から見た就学・就職移動」近藤博之編『日本の階層システム 3 戦後日本の教育社会』東京大学出版会, pp. 57-76.